

第6章 総 括

第1節 縄文時代

1. 遺 構

今回の調査では、縄文時代後期後葉を主体とする遺構が発見された。遺構種別の内訳は、土坑・柱穴(小穴)・流路跡(第19号流路跡)である。これらは、既に北隣で発見されている環状掘立柱建物群(径75×65m程と推定)の南西側縁辺部に形成された遺構となる(次図)。

土坑は、建物群の外縁側に沿って築かれた土坑群の一部に該当し、柱穴(小穴)は略完形土器が正立状態で埋置された1基のみとなるが、これも建物群に伴う施設とみなされる。

流路跡は、集落跡の捨て場(遺物集積・廃棄場)となっていたが、本来は縄文時代中期後葉以降より形成・埋没が進んだ自然流路だったとみなされる。その流れは、大きく見ると標高の高い東岳方向(東側)から、同じく標高の低い陸奥湾方向(北西側)へと向かうものであった。

本流路跡の要点を中心に述べると、その基盤・底面となるV層の形成時期は、同層によって大規模に開析されるVI層段階(前期末葉円筒下層d式)以降、特に中期後葉の最花式以降から後期初頭の牛ヶ沢式(下記)の間である可能性が今回の調査により高まった。

主な遺物のまとまり、つまり遺物包含層や文化層の形成は、IVb層段階(後期前葉十腰内I式前半期)から始まる。本層には土器・石器・土製品等を一定量含むため、周辺に小規模な集落跡の存在を予測させるが、その一部は既報告に竪穴建物跡や土器棺墓として垣間見えているほか(次図)、調査区外に広がる丘陵地に居が構えられていた可能性もあるといえよう。

この後、本報告の主体となるIVa層段階(後期後葉十腰内IV～V式期)が続くことになり、先の環状掘立柱建物群の外縁部に土坑帯、そして捨て場が数箇所形成される(第11号・12号・19号流路跡)。この時期としては、北の上野尻遺跡同様、本県を代表する規模・内容の集落跡である。当時としても、青森平野東端の要衝に位置し、東岳山麓の里山かつ陸奥湾にも近い本集落は、その規模のみならず、環状掘立柱建物群を核とする拠点集落だったと想定される。

ところで、本報告中の第19号流路跡内に形成された捨て場は、目下、本集落内では最大規模となっている。今回の発見は、そうした状況を示す大量の土器・石器・土製品・石製品などが自然流路内に集中し、当時の最終的な姿を偲ばせる。出土状態が良好だったのは、平安時代までに形成されたIII層に覆われていたからである。これにより、中世の集落形成や江戸時代以降の開墾による影響を免れた訳だが、一部、大地を深く刻んだ流路や用水路掘削、圃場整備により搅乱されている地点も認められる。

ちなみに、本段階で注目される出土状況を挙げると、建物群に近い場所に大量に捨てられた遺物群、注口土器多数が土器塚状に重なり合う地点、こうした土器の集積に硬玉・軟玉製装飾品や玉石、奇岩状の原礫・石核、異形石器、各種土製品や土偶などの第二の道具が伴うような姿が指摘される。特に、玉石のまとまりとともに現れた軟玉製装飾品は、該期としては稀な大きさであり、硬玉製小玉とともに当時の広域流通を物語る品となる。これは土器や石器にアスファルトが多く使われている点からしても、津軽地方を通じた日本海側との関連性がより強かったことを想起させる。無論、これら希少例以外にも、第一の道具というべき使用痕が顕著な各種土器や石器が大量に発見されている。つまり、第19号流路跡の出土品からは、当時の日常と非日常、その両方が垣間見えていることになろう。

2. 遺 物

縄文時代早期中葉から晩期までの遺物が出土した。主体となるのは、後期前葉と後葉である。後期初頭を除くと、その他は流路跡形成後に調査区北側を中心とする遺物包含層から混入した断片的遺物である。以下、各時期の要点を記載するが、1点のみとなる晩期は第3章4節を参照のこと。

早 期

中葉段階：白浜式土器の破片が出土。北側隣接地に、目下、津軽地方最古の集落跡(Ⅶ層段階)が存在しており、そちらからの流入とみられる。一部、同一個体と推定される土器片が認められる。

前 期

末葉段階：円筒下層d式土器の破片が出土。これも北側隣接地に形成されている包含層(Ⅵ層段階)からの流入であろう。本層中の遺物数や土器の個体数・残存率は今のところ低く、遺構も未発見だが、周辺に小規模な集落が存在する可能性も否定できない。

中 期

後葉～末葉段階：最花式と大木10式併行の土器片が出土。前者はⅣc層より出土、北側隣接地で発見されている最花式の土器片敷石圍炉との関連性が先ず想起される(県603集)。後者はⅣa・Ⅳbへの混入。遺跡全体でみると、本段階の竪穴建物跡は比較的知られており、特に調査範囲の南東側(県391・433・456・473集)。該期の集落規模や範囲は、後期後葉に次ぐ規模と推定され、今後、更なる発見と検討が期待される。

後 期

初頭段階：牛ヶ沢式土器が3個体分出土。VS・VT-210のⅣb～V層最上部の砂層より発見した。本遺跡における該期遺物の発見は稀である。当初、残存率の高い破片のまとまりとして確認し、慎重に精査した。直上部まで現代の搅乱を受けていたせいもあり、遺構認定には到らなかつたが、当時の人為的な廃棄・混入であることは、遺存状況より明らかである。僅かな量ながら、これらがV層最上部から発見された意義は大きく、本層の形成時期のみならず、遺跡全体の地形や考古学的変遷を考える上でも重要な成果といえる(上記)。

前葉段階：十腰内Ⅰ群土器前半期と、これに伴う土製品・石器・石製品がⅣb層から一括出土(上記)。その分布範囲は、VS-221周辺に集中する。各遺物の詳細は、第3章を参照のこと。本段階前後は、隣接する上野尻遺跡や山下遺跡における遺物出土量が増加、約2km離れた山野峠遺跡では石棺墓や再葬土器棺墓群、約3km離れた稻山遺跡に拠点的集落が築かれるなど、周辺一帯における人的活動が活発化する時期でもある。しかしながら、この宮田地区において、竪穴建物等をはじめとする集落の痕跡は幾分不明瞭である。続く十腰内Ⅰ群土器後半期は、本遺跡の第12号流路跡に一定のまとまりをもつ遺物が知られるものの(県613集)、中葉に下った十腰内Ⅱ群段階以降、十腰内Ⅲ群とみられる土器片を僅かに認める程度の様相となり、青森県下全般と同じく空白的状況を迎える。

後葉段階：十腰内Ⅳ～V群土器を中心、土製品・石器・石製品等がⅣa層から良好な状態で多数出土(上記)。該期文化の解明に大きく貢献する成果となった。こちらも、各遺物の詳細は第3章を参照。本段階は、後期中葉の歴史的空白ないし後期後葉への萌芽的状況から、大規模な環状掘立柱建物群を核とする集落構造が確立した時期と評される。同時に、ここで培われた社会システムが、やがて上野尻遺跡で発見されている同様の集落へと移行・継承されていく段階と仮定される。 (佐藤)



県613集『米山(2)遺跡VII』第6章第1節図102に加筆
米山(2)遺跡 遺構配置図(縄文時代後期中・後葉中心)

第2節 中 世

今回の調査では、遺構が掘立柱建物跡3棟、柱穴94基（うち24基分は掘立柱建物跡）、カマド状遺構14基、土坑7基、溝跡（流路）10条、井戸跡1基、同じく遺物が青磁碗片1（SD36出土、龍泉窯系D-2類、15世紀代）、擂鉢片1（SD35出土、珠洲Ⅲ～Ⅳ期、13世紀後葉～14世紀後半代）が発見された。遺構は、概ね平安時代までに形成されたⅢ層を掘り込んで形成されており、その種類・性格も過去の調査で発見された本時代の遺構群と同等と考えられる。

これらの位置関係・構築順序・出土遺物を検討した結果、今回発見された遺構群は、15世紀以降、少なくとも4期の変遷が想定された。以下、その概要と中世米山集落の概略をまとめ、結びとする。

（1）本調査の遺構および歴史的変遷

1期

概 要 15世紀代には成立していた区画と排水を兼ねた溝に囲まれた屋敷地と推定。掘立柱建物跡1ないし3棟、カマド状遺構6基以上、井戸跡1、溝跡6が関わっていると想定。

掘立柱建物跡 SB33が該当。溝との位置関係から本期とした。母屋か。小屋とみられるSB34・35も本期または3期に属す可能性がある。

カマド状遺構 SF21～24（N-90°-E前後）、SF26・27（N-180°-E前後）が、本期の掘立柱建物跡や溝跡と整合的な位置関係にある。付近にSF18・19・20・25（N-135°-E前後）も存在するが、上記とは長軸方向が45°前後異なり、南に位置するSD41や2期のSD34との類似性を示す。このため、本期以外、もしくは北側に建物跡（後世の流路22により破壊）の存在を考慮しておく必要性もあると考えられる。

井戸跡 SE03が該当。これも隣接する掘立柱建物跡（SB01）との位置関係から本期とした。

溝 跡 SD39・40・41・42・44・46が該当。SD40覆土中より青磁碗片1（上述）が出土。SD39は、掘立柱建物（SB01）軒下の雨落溝ないし小区画溝、SD40・42・46は一連とみられる屋敷地の区画・排水等の区画溝、SD41・44はSD42に接続する区画ないし排水溝とみられる。SD42に新旧の掘り直しあり。

2期

概 要 1期の屋敷地を横断・破壊するように形成された自然流路を主体とする段階。

カマド状遺構 SF18・19・20・25（N-135°-E前後）の長軸方向がSD34の長軸方向に類するが本期に属すか否か不明（1期参照）。

溝 跡 SD34・35が該当。両者は一連の遺構・流路が分岐したものである（VO-223付近）。SD35覆土中（3層相当）より、擂鉢片1（冒頭）が出土。SD34は直線的かつ人工的であり、かつての調査では木杭が並んでいたような痕跡も認められる（VP-222付近）。他方、SD35は、後に人工的な手が加わっている可能性もあるが、大きく蛇行する形状からすると、当初は自然に形成された流路だったといえる。埋没は、いずれも自然堆積を主とする。自然的要素の強い本流（SD35）と人工的要素の強い支流（SD34）という見方が成り立つかもしれない。

3期

概要 2期の自然流路が埋没した後に形成された屋敷地と推定。SB34・35が本期となるか否かが鍵となる。

掘立柱建物跡 SB34・35が該当する可能性あり(1期参照)。下記カマド状遺構との位置関係による。

カマド状遺構 SF14～17が該当。主軸方向より、SF14～16(N-90°-E前後)、SF17(N-180°-E前後)に分かれる。1・2期の溝跡よりも後出し、SB34・35との位置関係も整合的である。

4期

概要 1～3期の遺構群とは堆積土が明らかに異なる最新の溝2条と土坑1基が該当。中世～近現代に属す可能性を想定しておく必要もある。

土坑 SK203が該当。下記SD43と同一の覆土である。

溝跡 SD43・45が該当。具体的な機能や様相は不明。

さて、上記の変遷は、平安時代中期頃まで断続的に続いた東岳方向からの大規模な流路形成が収束に向かい、砂質土(第Ⅲ層)が堆積した後の15世紀以降に生じた事象となる。

最古となる1期は、遺構数が多く細分される可能性があるのに対し、次の2期は流路形成により遺構が希薄になったようにみえる。これもこの地で歴史的に繰り返されてきた東岳方向からの出水によるものか。この流路が埋没した後の3期は、再び屋敷地と化した模様である。なお、4期が中世に属すかどうかは定かではない。

このように、各期の遺構数および空間利用には粗密があり、具体的な年代や期間、連続性や継続性についても不明である。しかしながら、1～3期については、遺構の種類や選地をみる限り、時間差や世代差は比較的小さいと思われ、この変遷に繋がりがあったとすれば、2期の状況を重視した仮説を一つ示すことが可能である。

すなわち、1期以前の屋敷地ひいては村落の一部が、2期の流路形成を機に移転を余儀なくされ施設が一時的に希薄化、流路埋没後の3期に再び屋敷地に復したとする見方である。

要は、15世紀以降のある時期、青森平野と陸奥湾を望む東岳山麓の村の一角で生じた小規模な水害による屋敷地の一時的移転・衰退とその復旧・復興、という仮説となるが、今後、周辺の調査成果も考慮しつつ、是非が判断されることになろう。

(2)中世米山集落の概略

ところで、こうした中世集落は、米山(2)遺跡のみならず、周辺の宮田館遺跡や上野尻遺跡にまで及んでいたことが、これまでの発掘調査成果から判明している。

中世米山集落は、東から西へ緩やかに下る低湿地性の扇状地上に位置し、地下水位が高く、今も水源地とされているほど湧水豊富な土地柄に構えられていた様子が解りつつある。現在も春先や長雨後などは出水があり、縄文時代以降、東岳方向より地形や景観を一変させるような土石流が発生したことも幾たびか認められるが、中世段階は砂質土(第Ⅲ層)や礫層(第Ⅴ層)を基盤とする比較的水はけの良い緩斜面と化し、その微高地上を中心に屋敷地が散在していたと想定される。

各屋敷地の概要については、やや規格性を欠く掘立柱建物跡・竪穴建物跡を中心に、カマド状遺構・井戸・柵(塀)・区画溝などが備わる構造が散見される。つまり、屋敷内は母屋・小屋・炊事場・水場・外構などにより構成されている。そして、付近には自然流路や、これから枝分かれする人工的な溝、カマド状遺構ばかりが集中する地区、火葬墓や土葬墓なども存在するような状況だったと推測される。

村落の時期は、時期を明確に示す遺物量が少なく具体性を欠く部分も多いが、早く12世紀後半、少なくとも13世紀前半には成立しており、14～15世紀代を盛期として、中世末まで断続的に続いた可能性がある。江戸時代前期の正保年間(1645～1648)以前には、「大石村」が本遺跡北側周辺に存在していたとも伝わるが(『阿津摩岳郷土誌』)、貞享4年(1687)には米山一帯が田畠と化していたことが知られる(『陸奥国津軽郡田舎庄御検地水帳』)。なお、考古学的成果を中心とする歴史変遷案は、最近ようやく詳細が示されつつあるので別途参照されたい(鈴木2021)。

また、遺跡南側の丘陵地には、各種史料や伝説より寺・板碑・五輪塔などから成る宗教的空間が存在していた可能性が高く、これらが江戸時代中期から後期には既に伝説と化していた事実も知られる。とりわけ、多数あったとされる板碑や五輪塔の中でも青森平野において唯一現存する延文の板碑(延文2年(1357))、寺跡や寺屋敷と伝わる土地の脇に今なお樹勢を保つ樹齢800年の宮田のいちょうは特筆すべきものであり、中世米山集落の在り方を象徴する存在となるかも知れない(県613集2章)。

青森平野の東端に位置し、本県南部地方との窓口ともなり得る中世の当村は、一般集落的な側面に加え、時として宗教的要素や水源地を要する本地域の開発拠点だった要素も垣間見える訳だが、その村名は不詳である。

最後に、本遺跡が所在する青森市は、通称、外浜や合浦と称される地である。

その中世史は、平安時代の奥州藤原氏の支配と滅亡の後、鎌倉幕府の実質的支配者である北条氏が北奥一帯を得宗領とし、その被官たる安藤氏を外浜に配したとされるところより始まる。

14世紀に入ると、安藤家中を二分する嫡庶の争いが津軽大乱と称されるまでに拡大、これをうまく調停できなかった鎌倉幕府の求心力は低下したとも評されるが、やがて幕府は滅亡する。

直後の建武期、東の野尻郷に工藤氏、西の内摩部・泉田・湖方・中沢・真板等の郷村、すなわち安藤氏の拠点に近い要衝の油川近郊を南部氏が領有、とともに現在の青森市街地一帯を治めたことが知られる。

その後、15世紀半ばと推定される安藤氏滅亡より、その影響力も次第に外浜から消えていったとみられる。これと連動するのか、やや下った明応7年(1499)には、南部氏一族である南部光康(堤氏)が津軽郡代として堤ヶ浦城に入ったと伝わり、16世紀代における南部氏の津軽・外浜支配が強まる嚆矢となった可能性がある。この頃、南部氏の庇護の下にあったといわれる浪岡北畠氏の影響力も、外浜に及びつつあったことであろう。

戦国時代末期、南部氏の外浜支配は、先の堤ヶ浦城から移転した横内城、陸奥湾随一の港を抱える油川城を核に、配下諸士が治める高田城・荒川城・蓬田城などが構えられていたとされるが、大浦氏の独立により滅亡、以後、近世を通じてその末裔である津軽氏の支配するところとなった。

中世米山集落一帯の村々は、その名は未詳ながら、こうした外浜の中世史、奥州藤原氏から安藤氏、そして南部氏から津軽氏の支配への移り変わりとともに存り続けたといえる。しかし、近世前期には耕作地と化し、やがて寺跡などの宗教的要素を中心とする伝説や碑が伝わりつつ、今日の調査に到ったと概ね考えられる。

(佐藤)